

# 鞠智城の役割に関する一考察

## —熊襲・隼人対策説への反論—

木村龍生

### 1. はじめに

鞠智城の役割については多くの研究者によって様々な議論がなされているが、現在でも確定はしていない。熊本県教育委員会としては、その地理的立地などから、「大宰府への兵站基地」という役割を公式見解としている（西住・矢野・木村編 2012）。

鞠智城の役割論については、坂本経堯氏が提示した、「有明海侵入敵の確認と伝達」、「大宰府非常に備えるための物資・兵器の蓄え」、「九州南部の熊襲族に対する重鎮」という3つの説が現在でも研究の基礎となっている（坂本 1937）。これをふまえて、各研究者がそれぞれ論を展開しているのが現状である。そのため、鞠智城の役割については様々な説があり、これとって確定されていない。

これらの役割論の中で、筆者が異様に感じていたのは、「九州南部の熊襲族に対する重鎮」というものである。鞠智城の立地が南を向いているため、大宰府方面よりも熊本平野や有明海など南からの敵が想定されていたとし、鞠智城は南方の熊襲・隼人対策の拠点であったとする説である。しかしながら、熊本の古墳時代を研究している人間からすれば、この論についてはまったく賛同できない。ここでは、それについて述べてみたい。

### 2. 鞠智城の役割についての研究略史

鞠智城の役割に関する議論は、先述したように坂本経堯氏による指摘が現在でも基礎となっている（坂本 1937）。坂本氏は、鞠智城跡の周囲が急峻な侵食谷により天然の要害をなすこと、国府を含め肥後北部の主要地域を遠望できること、防烽の古制などとの関連からも重要な位置にあること、大宰府への交通路に面していることなどから、その役割を、①有明海侵入敵の確認と伝達、②大宰府非常に備えるための物資・兵器の蓄え、③九州南部の熊襲族に対する重鎮、であると想定した。

①、②に関連した認識の研究者には、鏡山猛氏、島津義昭氏がいる。鏡山氏は、鞠智城の役割について「戦略的な意味よりも、軍略的な意味が強かった」との見解を示した（鏡山 1968）。また、島津氏は、「建物の周囲の数カ所から炭化米が出土していることは、この城が食料備蓄的な性格を持つものであることを良く示している」と言及した（島津 1983）。

①、③に関連した認識の研究者としては、乙益重隆氏がいる。乙益氏は、外敵対策を築城の主な目的としつつも、さらに突っ込んで有明海・八代海方面から侵入する外敵対策が考慮された可能性を指摘した。また、南九州の隼人対策も考慮された、との指摘を行った（乙益 1985）。

西谷正氏は、①をさらに一步踏み込んだ、積極的な認識を持っており、鞠智城が単なる兵站基地ではないと断じ、有明海を進入した唐・新羅連合軍をいち早くとらえ、その情報を大宰府に送るとともに、連合軍を背後から撃つという積極的で、戦略的な機能を想定した（西谷 2007）。また、大宰府を中心に、その北の守りが金田城であれば、鞠智城は南の守りとして対等の関係にあったのではないかと指摘する。

③に関連した認識の研究者には、西住欣一郎氏、甲元眞之氏、岡田茂弘氏がいる。西住氏、甲元氏は鞠智城内の内部に官衙的建物群が存在することから政庁的役割を有するようになり、8世紀前半以降には南九州の動乱に備える機能に変化したとする（西住 1999、甲元 2006）。岡田氏は、鞠智城の築城は白村江の戦い直後の防衛のためだけでなく、多様な官衙施設を設置するために築造もしくは改修され、南九州での不測



いえる。よって、鞠智城が現在の位置に築城され、南向きであるということは、地形的制約による理由が大きかったといえることができる。

なお、GISソフト「GIS map」を使って、鞠智城からの可視範囲を客観的に示したものが第3図である。これを見ると、鞠智城から見渡すことができるのは、ほぼ菊鹿盆地のみであるということがよくわかる。遠くの山々を見渡すことはできるが、有明海はまったく見えない。ましてや、熊本平野以南の地域で何か緊急事態が起こっても、鞠智城からはまったく見えない。あくまで、菊鹿盆地のみに視界を利かせるかのごとき位置に、鞠智城が築城されていることがわかる。菊鹿盆地、特にその東部は、古墳時代後期後半に後の車路と呼ばれる官道の基になる交通ルートが通り、筑後平野、阿蘇谷、熊本平野の各方面に分岐する交通の要衝となる。さらに、この地域は古墳時代後期後半以降、米の生産量増加などにより発展した穀倉地帯であり、それによ



第3図 鞠智城からの可視範囲

によって有力な豪族が登場した地域であった（木村 2011）。そのため、菊鹿盆地東部は中央政権にとっても、極めて重要な地域として認識されるようになったと思われる。

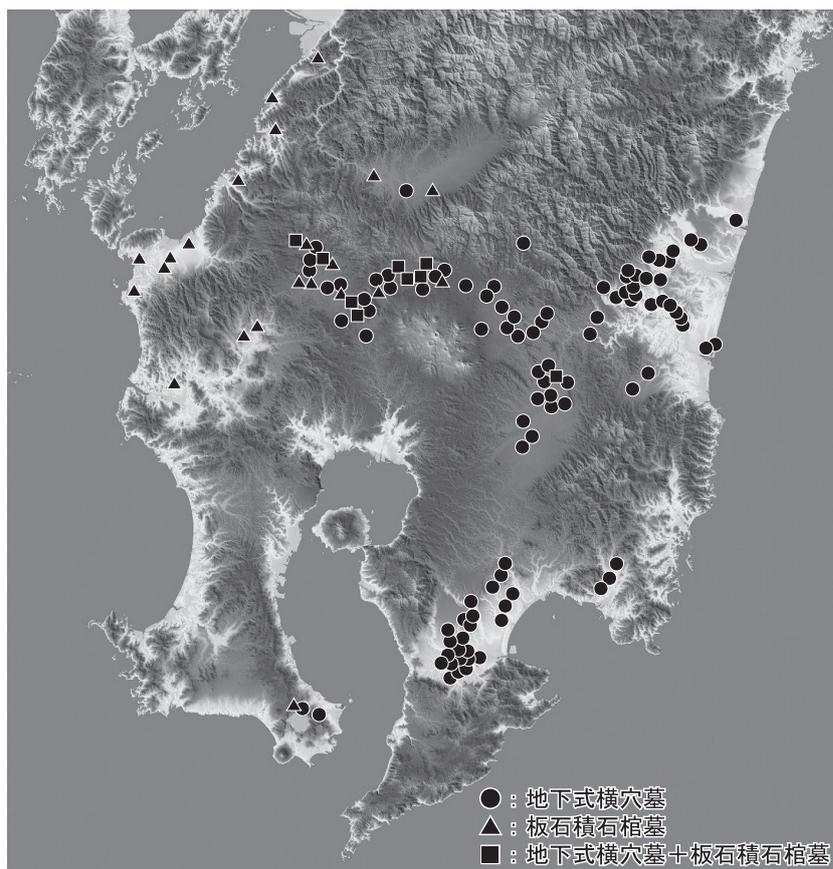
つまり、鞠智城がこの地に築かれたのは、交通の要衝であったこと、穀倉地帯である菊鹿盆地を抑えること、そこへ視界を利かせるかのごとき地点を選定していること、後背に山がそびえ天険の要害となる地形が存在していたことなどの地形的・地理的要因が最も大きな理由であったと考えられる。

## （2）古墳時代後期後半以降の熊本について

次に、熊本の古墳時代後期以降の状況について述べておきたい。

県北から八代平野部までの範囲は、古墳時代の早い段階から近畿の古墳文化を受容し、中央政権とも関係を持っていた地域である。特に古墳時代後期後半以降、氷川流域・八代平野部は火君の本拠地と考えられ、当時の九州の中で 100 m級の前方後円墳を築造する数少ない地域の一つであったとともに、古墳の築造数が急増する地域である。なお、火君は馬門石の石棺を近畿の天皇陵などへ輸送する事業にも、強く関与していた。また、八代市山口第2号墳からは、熊本で唯一、近畿の古墳石室内に安置される木棺に取り付けられるものと類似する金銅製の棺金具が出土している（古城 2012）。さらに、この地域は『日本書紀』に登場する葦北国造刑部鞆部阿利斯登の子「日羅」とも関係する地域である。日羅は、当時中央政権で権勢を誇った大伴金村を「主」と呼んでいる。このようなことから、当時の八代地域は中央政権との関係が極めて強く、その支配体制に確実に組み込まれていた地域であったといえる。

球磨地域では、古墳時代前期後半から中期の半ば頃にかけて、板石積石棺墓や地下式横穴墓と呼ばれる南九州によく見られる墓制がとられていた（第4図）。前者は“熊襲の墓”、後者は“隼人の墓”といわれてい



第4図 古墳時代の九州南部の墓制の分布

た墓制である。それが、古墳時代中期後半になると、球磨地域にも横穴式石室の導入、前方後円墳の築造、また帯金式甲冑や陶器産須恵器など中央政権との関連が認められる文物が出土するようになるなど、一般的な古墳文化が浸透する。これ以降、球磨地域は古墳や横穴墓が普遍的につくられるようになり、独自の地域性などはなく、熊本平野や八代地域ともほぼ変わらない様相を呈するようになる。このようなことから、球磨地域も古墳時代後期には熊本平野や八代平野、そして中央政権とも交流などを行っていたということがいえる。なお、板石積石棺墓や地下式横穴墓が

熊襲・隼人の墓であるという説は、その墓制の系譜や出土遺物等の検討から、最近では明確に否定されつつある（橋本 2010）。隼人自体の存在は、考古資料ではもはや明らかにすることができない。橋本氏の、「熊襲・隼人は7世紀後半以降の古代国家の枠組みの中に位置づけられた存在であって、九州南部の古墳時代人の実態ではない。」とする見解に筆者も賛同する。

球磨地域と同じような状況は天草周辺でもいえる。天草地域にも、古墳時代中期後半から独立片逆刺長頸鎌、帯金式甲冑や陶器産須恵器など中央政権との関わりを示すような文物が認められるようになり、横穴式石室や横穴墓も導入され、周辺地域と同じような古墳文化が浸透していく。後期以降になると、天草地域では特に独自性は見られなくなる。

このように考古資料で見ていくと、球磨地域、天草地域も古墳時代後期以降には、それ以北の地域と同じ古墳文化を持ち、中央政権の影響下に組み込まれていた状況である。特に球磨地域は、従来いわれていた熊襲といわれる人々の痕跡は、まったく確認できない。先述したように、古墳時代を考古学的に解釈すると、熊襲・隼人という存在を見出すことは難しい。つまり、鞠智城が築城される頃には、熊本県南、そしてそれ以南でも熊襲・隼人の足跡を追うことができないのである。記紀などに、この時期の熊襲・隼人についてはほとんど述べられていないのは、彼らの活動が活発でなかったこと、あるいは存在さえなかったことを示すのであろう。そのような中で、熊襲・隼人対策という目的で鞠智城を築城するようなことはあり得ない。

古墳時代後期後半からの流れで見れば、先述したようにこの時期に菊鹿盆地東部が交通の要衝となったこと、穀倉地帯であったことなどの理由から、この地を重要視した中央政権によって鞠智城の築城場所としてこの地が選定されたと考えることが最も妥当と思われる。

ところで、7世紀末から8世紀前半にかけて、隼人の反乱記事が『続日本紀』等に見られるようになる。この隼人の反乱記事は、大隅国、唱更国（後の薩摩国）設置前後にその周辺でのみ起こっているものばかり

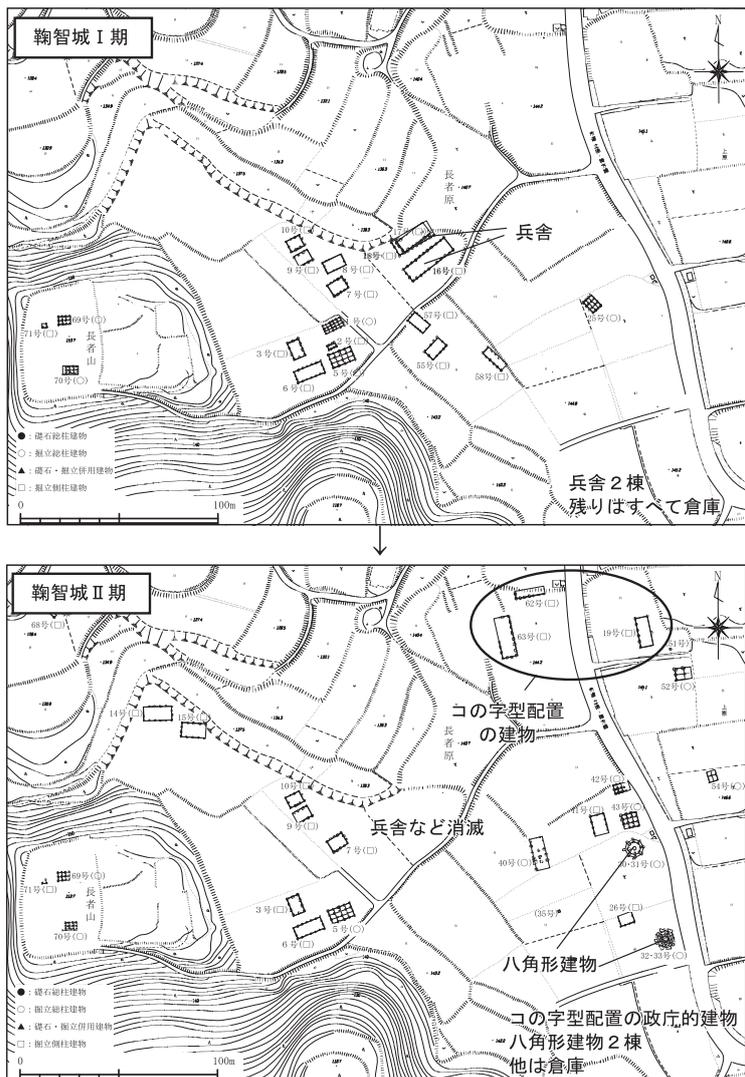
である。これは、中央政権による令制国の設置及び律令制そのものへの、隼人たちの反抗であったのではないだろうか。これに対し、肥後国内でそのような反乱が起こった記録はなく、考古資料でもそのような痕跡は一切認められない。これまで述べてきたように、熊本県下の各地域では古墳時代の後期後半には中央政権との関係が良好となっていたため、律令制の導入もスムーズに進んだと思われる。隼人の反乱は、あくまで大隅国内、唱更国内で起こった問題と考えるとよい。このような状況で、肥後において大隅、唱更で起こった隼人の反乱に備えるとしたら、大隅や薩摩の隼人が肥後国内にまで進入してこないようにすることであろう。そのためには、球磨地域と薩摩との境や芦北・水俣の南くらの位置に城などの拠点を置くことが戦術的にも常道であるし、肥後国府周辺の守りを固めるということが必要になる。これらの隼人対策は肥後国でも行われていたかもしれないが、それは鞠智城の関与するところではなかったものと思われる。その理由を次に述べる。

### (3) 鞠智城の繕治について

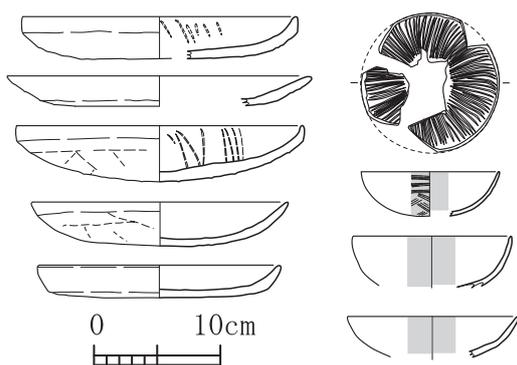
隼人の反乱に前後する 698 年、大宰府をして大野、基肄、鞠智の 3 城を繕治したという記事が『続日本紀』に記載されている。この鞠智城の繕治の目的が、隼人対策のためであったとしてとらえられる場合がある。果たして、そうだろうか。

鞠智城は築城時（鞠智城Ⅰ期）に堀切、深迫、池ノ尾の各城門、南側・西側の土塁を含む外郭構造が急造され、防衛施設としての機能が整備された。それとともに、長者原地区の中央部から西側にかけて掘立柱建物群が建設され、貯水池も造営された。築城時は城の主たる施設が整備された段階と位置づけられるが、建物は倉庫と思われる小型の建物が多く、その他は兵舎が 2 棟建てられた程度で、内部施設の整備までは及んでいなかった（第 5 図）。このことから、鞠智城が軍事施設として急ピッチで築城・整備されたということがわかる。

それが、698 年の鞠智城の繕治記事に対応する 7 世紀末～8 世紀初頭を中心とする時期（鞠智城Ⅱ期）になると、鞠智城の中核域となる長者原地区東側から上原地区北側にかけての「コ」字形に配置された掘立柱建物群が出現するとともに、その南側に総柱の倉庫群が建設されるなど、内部施設の充実が図られる。八角形建物が増えるのもこの時期で、鞠智城Ⅰ期と比べ建物構成に大



第 5 図 鞠智城Ⅰ期とⅡ期の建物と配置



第 6 図 鞠智城Ⅱ期の畿内系土師器

なかつた。つまり、繕治による鞠智城の修繕は、軍事的な施設強化ではなく、政庁や城のシンボルとなりうる八角形建物を建造するなど政治的意味合いを付与するための大がかりな施設改修であったといえる。

この繕治が行われた 698 年ころは、大宰府ではⅠ期新段階にあたる。この時期は、実質的に大宰府体制が発足した時期で、大宰府Ⅱ期に登場する礎石建物の政庁の前身ともいえる掘立柱建物や柵列が建設された時期とされる（小田 2012）。これは、中央政権が大宰府を対外交渉の窓口とし、さらに九州全体を統括させるために、その拠点施設として整備させたものと考えられる。鞠智城は築城からその後の変遷にかけて、大宰府の変遷と連動していることが指摘されているため、698 年の鞠智城の繕治も、この大宰府Ⅰ期新段階の動きと連動したものととらえられる（西住・矢野・木村 2012）。大宰府が九州全体を統括し、これから律令制の導入を本格的にすすめていくためには、多くの拠点的施設が必要であったと思われる。大宰府による修繕は、鞠智城を肥後北部におけるそのような拠点施設とするためのものであったのではないか。これが鞠智城Ⅱ期に、コの字形配置の政庁的建物が登場した背景であったに違いない。なお、この鞠智城Ⅱ期の土師器を見ると、大宰府が生産を管理していた九州最大の須恵器生産地であった牛頸窯跡群の須恵器や畿内系の土師器（第 6 図）も多々出土しており、土器出土量が他の時期よりも圧倒的に多い。つまり、鞠智城の繕治には地元民だけでなく大宰府や中央政権からも多くの人が派遣されていたということ、その後の運営に必要な土器などの物資は様々なところから集められていたことが想定できる。鞠智城は築城だけでなく、繕治、そしてその後の運営も国家が絡む重要な拠点となっていたことがうかがえる。

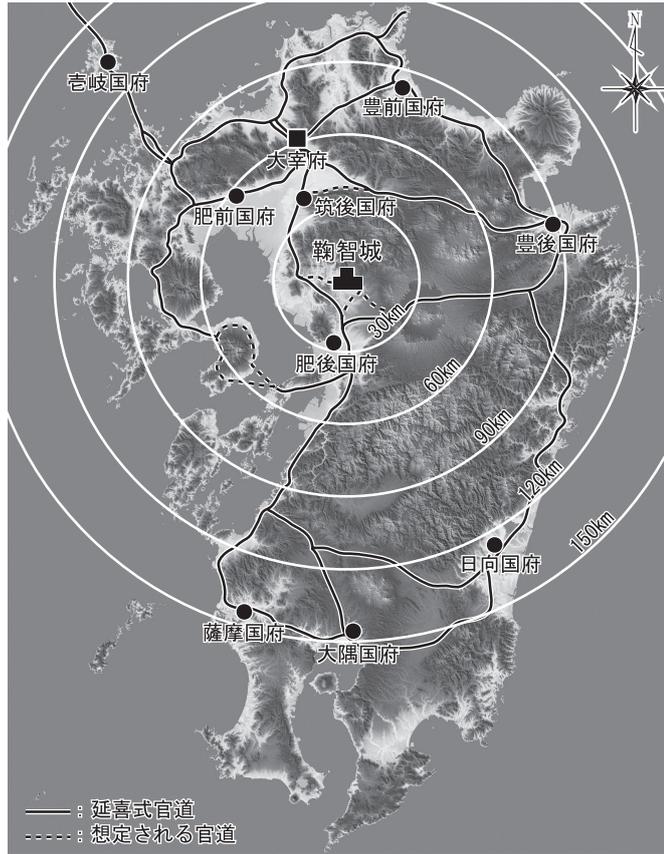
鞠智城の改修が隼人対策のためのものであるならば、城の防衛機能や物資貯蔵機能を強化することが主体となろう。政庁のような役所機能は必要ない。それにも関わらず、政庁やシンボリック建物が建設され、兵舎が消失し、防衛機能にかかるものは新設されていないことから考えると、698 年の鞠智城の繕治は、隼人対策とはまったく関係の無かったものとしてよい。

#### （4）鞠智城からの距離について

続いて、鞠智城からの各施設の距離について考えてみたい。

鞠智城から大宰府まで、直線距離で 62km ある（第 7 図）。現在の車道で最短距離を計測しても、81km 強の距離となる。飛鳥時代当時、歩兵が軍隊の中心である。歩兵の行軍距離が約 4 km/h とすると、鞠智城を発した軍団が大宰府まで到着するには、休みなくどんなに行軍速度を上げても 20 時間以上の時間がかかる。つまり、大宰府が危機に陥った場合、その連絡が烽火などで鞠智城に 1～2 時間程度で届いたとしても、それから軍団が駆けつけるとすれば、2～3 日を要することになる。このような地理的關係であったことは、鞠智城が大宰府を直接的に防衛するための城ではなく、大宰府をバックアップするための後方支援基地であったといわれる大きな理由の一つである。

南に目を向けてみよう。鞠智城から春日部屯倉や、国府があったと考えられる熊本市中央区出水まで、現在の車道の最短距離でも、30km以上の距離がある。ここに、鞠智城から軍団が駆けつけるとすると、8時間弱の時間がかかることになる。大宰府へ行くことに比べれば半分以下の距離となり、1日あれば軍団は駆けつけることができるが、直接的な国府の防衛という点でとらえることは難しい。国府を直接的に守るのならば、大宰府に対する大野城・基肄城、豊前国府に対する御所ヶ谷城、肥前国府に対する帯隈山城、筑後国府に対する高良山城のように、国府に隣接したような箇所に山城等の防衛施設を配するのが妥当であろう。きっと、肥後国府にも隣接した地点に防衛施設等が存在したに違いない。そうすると、鞠智城は肥後国府に対しても後方支援的役割を果たしたものと考えるのが妥当ではないだろうか。



第7図 鞠智城からの距離

さらに南を見てみよう。もしも隼人対策として本当になんらかの対策をとる必要があるならば、先述したように球磨地域と薩摩との境や芦北・水俣の南くらいの位置に拠点が必要となる。その場合、鞠智城からは直線距離で100km以上の距離があり、現在の車道でも最短で130kmの距離になる。これは、鞠智城から大宰府までの距離の倍、鞠智城から肥後国府までの4倍近い距離である。これだけの距離があれば、鞠智城から軍団が駆けつけるのに4～6日もかかることになる。物資を運搬する輜重部隊などの場合、この2～3倍の時間を要することになる。後方支援は、兵員の補充、物資の運搬など、適切に迅速に行うことができる体制をとらねばならない。そうすると、鞠智城は対隼人対策の後方支援、兵站基地としてはやや距離がありすぎる。隼人対策の最前線に対する後方支援基地は、別に肥後南部あたりに存在したと考えるのが妥当であろう。ただし、その後方支援基地に物資を蓄えるために、鞠智城に蓄えられていた物資が運搬されたということはあるかもしれない。

以上のことから、鞠智城が後方支援として対応できるのは、大宰府、肥後国府あるいはそれと同等の距離までの範囲であったと推測する。鞠智城から半径60km前後といったところだろうか。それよりも遠方の地域には、それぞれ別の兵站基地を配置しておいた方が戦術的にも妥当である。鞠智城が隼人対策のための後方支援基地としての役割があったとは考えられない。

### (5) 古代城柵との比較について

鞠智城の役割について論じられる際に、よく古代城柵と比較されることがある。

古代城柵とは、7世紀から9世紀頃までの古代日本において、東日本に中央政権によって設置された施設である(第8図)。647年に淳足柵が設置されたのを初めとし、中央政権の勢力拡大と共に古代城柵も北へと移動していった。その分布と中央政権の勢力範囲との関係を見ると、中央政権の勢力範囲内で蝦夷の勢力範囲に近い最前線の位置に、古代城柵は設置されているのがわかる。そして、中央政権の北伐が進み領土が



第8図 城柵の分布図と中央政権の勢力範囲

たように、鞠智城が隼人対策の城であるということは極めて難しい。ましてや、古代城柵のように対隼人の最前線という位置にあるわけでもなく、最前線から100km以上も離れた距離にある。つまり、鞠智城が隼人に対する古代城柵のような役割を持っていたということはある得ない。もしも、隼人対策のために古代城柵のような施設を南九州に設置するとしたら、それこそ何度も述べたように球磨地域と薩摩との境や、芦北・水俣の南などの位置になるだろう。

なお、筆者は699年に築城（修繕か）の記事が見られ、未だ所在地が確定しないが日向国児湯郡三納（宮



第9図 古代山城と国府の位置

北に拡がると、その勢力範囲内で蝦夷に対する最前線に近い位置に新たに古代城柵を設置していくということが繰り返される。古代城柵は、軍事施設であると同時に、内部には政を行う政庁も設置され、周辺を統治するための行政施設でもあった。そのため、古代城柵が発展して、後に国府となったものも存在する。

この古代城柵の在り方を、鞠智城に対しても、あてはめようとする考えがある。それは、鞠智城が軍事施設でありながら古代城柵のようにコの字形配置の政庁的建物を持ち、南向きの城であることから、蝦夷に対する古代城柵のように、隼人に対する施設であったというものである。しかし、これまで述べてきた

崎県西都市三納)にも比定される三野城、大隅国桑原郡稲積(鹿児島県霧島市牧園町下中津川)にも比定される稲積城などが、そのような古代城柵に類似する拠点であったと考えている。そう考えると、この2城はそれぞれ日向国府、大隅国府に隣接した位置にあることにもなり、九州北部において古代山城の隣接地に国府が位置するという、古代山城と国府の在り方とも一致する(第9図)。また、古代城柵の政庁機能が後に近接地で国府に発展するという東日本における古代城柵の在り方とも一致する。三野城、稲積城の2城こそ、古代城柵と同じような機能を持って南九州に設置されたものと考えの方が妥当ではないかと考えるのである。ただ、これはあくまで推論である。三野城、稲積城は福岡県内に比定される説もあることから、今後の調査・研究の深化によって明らかとなっていく問題であろう。

#### 4. おわりに

これまで述べてきたように、地形的要因、地理的条件、前時代からの流れ、古代城柵との比較などの様々な点から検討して、鞠智城が熊襲・隼人対策のために築城、繕治された城ではないことが明らかとなった。

なお、「有明海侵入敵の確認と伝達」についても簡単に私見を述べておく。鞠智城からは、有明海はまったく見えない。仮に有明海からの敵を想定するならば、長崎県の島原周辺、熊本県の大矢野島や宇土半島など有明海の進入口に当たる部分のいずれかに、拠点を設置するのが定石であろう。現在のところ、それらの地点に拠点の跡らしきものは確認されていない。また、有明海は干満の差が6mにも達する海として知られている。1300年前当時でも、相当な航海技術を擁し、有明海の潮汐に関する知識を持っていた集団でなければ航行・上陸は難しい海であった。その有明海から馬門石の石棺を近畿まで運搬していた火君の勢力は、その卓越した航海技術により中央政権に重宝され、朝鮮半島への軍事行動などにも参加していたのであろう。そのような卓越した航海技術が必要である有明海を、地理的知識もあまりない唐・新羅連合軍が九州の西側を回り込むようにしてまで目指そうとするだろうか。大軍を整えて唐・新羅が日本へ押し寄せてくるとしたら、対馬・壱岐をたどって、兵力を分散し補給線を伸ばすことをせず、そのまま直接、松浦半島や博多湾などから大宰府へ向かうのが常道であろう。少なくとも、筆者は唐・新羅は日本侵攻をする上で、有明海を目指すことはないと考えている。

このように見ていくと、鞠智城の築城の目的は、交通の要衝かつ穀倉地帯であった菊鹿盆地を抑え、物資を貯蓄し、必要に応じて大宰府あるいは肥後国府などへ、その物資を運搬することであったとするのが最も現実的である。そして、鞠智城Ⅱ期段階には、律令制導入のための肥後北部の拠点として大宰府による改修で政庁的施設等が付与され、従来の役割であった物資の貯蓄と共に官衙的役割を果たすようになったと思われる。ただし、このような政庁的建物配置と官衙的役割を備える古代山城は、今のところ鞠智城だけである。他の古代山城では、古代山城自体が官衙的役割を有することはなく、国府等が隣接して設置される。それに比べると、鞠智城は特殊な古代山城だといえる。どうして鞠智城のみがこのような機能を持つのか、これについては今後の検討が必要であろう。ただし、今後の鞠智城研究に、熊襲・隼人云々という議論は、もはや必要ない。

#### 〈引用・参考文献〉

- 岡田茂弘 2010 「古代山城としての鞠智城」『古代山城 鞠智城を考える－2009年東京シンポジウムの記録－』 山川出版社
- 小田富士雄 2012 「第1節 鞠智城の創建をめぐる検討」『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8～32次調査報告－』 熊本県文化財調査報告第276集 熊本県教育委員会
- 乙益重隆 1985 「鞠智城（菊池城）」『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書第10巻 名著出版
- 鏡山 猛 1968 『大宰府都城の研究』 風間書房
- 木村龍生 2011 「鞠智城跡の古墳時代後期後半の集落について」『熊本古墳研究』第4号 熊本古墳研究会
- 甲元眞之 2006 「鞠智城についての一考察」『肥後考古』第14号 肥後考古学会
- 坂本経堯 1937 「鞠智城址に擬せらる米原遺跡に就て」『地歴研究』第10篇第5号 熊本地歴研究会
- 島津義昭 1983 「鞠智城についての一考察」『大宰府古文化論叢』上巻 吉川弘文館
- 西住欣一郎 1999 「発掘からみた鞠智城」『先史学・考古学論究』Ⅲ 龍田考古学会
- 西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 2012 『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8～32次調査報告－』 熊本県文化財調査報告第276集 熊本県教育委員会
- 西谷 正 2007 「鞠智城と菊池川文化」『菊文研だより』第19号 菊池川古代文化研究会

橋本達也 2010 「九州南部の首長墓系譜と首長墓以外の墓制」『九州における首長墓系譜の再検討』第 13

回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集 九州前方後円墳研究会

古城史雄 2012 「「鬼の岩屋式石室」について」『熊本古墳研究』第 5 号 熊本古墳研究会

〈挿図出典〉

第 1・2 図：西住・矢野・木村 2012 より転載

第 3 図：筆者作成

第 4 図：橋本 2010 を基に筆者作成

第 5 図：西住・矢野・木村 2012 を基に筆者作成

第 6 図：西住・矢野・木村 2012 より転載

第 7～9 図：筆者作成